

苦難の一年間

愛知県 合田茂彦

まえがき

昭和二十（一九四五）年八月十五日、日本の歴史上においてかつてなき敗戦という事態を、しかも日本に併合されていた朝鮮で、それも反日不穏分子が多いといわれている北朝鮮において遭遇し、その日から約一年間にわたる、酷寒の地での越冬生活を過ごした避難民生活の苦しさを綴ることになった。

しかし、あれから六十年近くが過ぎて、そろそろ恍惚の人となりつつある今日、私の人生における苦難の一頁を書き綴るのに、記憶が薄れているところもあって、何月何日といった時系列的なことを自信を持って記すことが難しくなり、既刊の関係書などを参考にして、努めて正確を期すように心掛けたが、多少の違いはあるものと思う。

一 私の生い立ち

戸籍謄本を見ると、私は昭和六年十一月十七日に、朝鮮咸鏡北道の茂山郡茂山面南山洞において生まれ、父合田栄之助が届出、同月二十七日受付入籍となっている。また下欄には、父合田栄之助、母キミエとあり、四男と記載されている。間違はなく朝鮮生まれである。

当然のことながら、乳幼児のころの記憶は全く無いが、引揚げ後に親戚から入手した写真の中に、正月に家族一同に加えてお手伝いさんたちと撮ったものがあるが、それから当時の生活状態がしのばれる。父が好きで記録写真をよく撮っていて、これを内地の親戚に送っていたので、今もときどき見ると当時のことを想像して懐かしく思っている。記憶に残っている思い出として、硬い殻を被った松の実でポケットを膨らませ、専用の小型ペンチでそれを割りながら食べたことが懐かしい。父が、病気療養のために勤めていた営林署を退職し、一家は父の本籍地である愛媛県に帰郷した

ので、私は地元の尋常高等小学校に入学した。

病が癒えた父は再び渡朝し、朝鮮合同木材株式会社に就職し屈松工場勤務となつて、まず単身赴任した。約半年後、学年の区切りのよい時期に母に連れられて、二人の兄、私、そして妹の五人は再び朝鮮に移つた。当初は、咸鏡北道の吉州小学校に転校したが、昭和十四年三年生のときに、父の会寧転勤によつて会寧小学校に転校し、昭和十九年三月にそこを卒業した。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発して、既に世の中は戦時態勢であつた。

私は小学生時代から、パイロットにあこがれていた。六年生のとき、民間航空機搭乗員養成所を受けたが、基準よりも体が一回りも二回りも小さかつたので、身体検査で不合格となつてしまった。それでも、どうしてもパイロットになりたかつたが、途中経過の手段として中学校に進学しなければならず、羅南公立中学校に入学した。

一年のときに陸軍幼年学校を受けたが、残念な

がら不合格となつた。二年生になつて、再度挑戦すべく受験勉強に励んでいたが、八月十五日終戦となり、悪夢のごとき避難生活が開始されて、パイロットになりたいという夢は、ここで頓挫してしまつた。

二 羅南中学の夏休み

昭和二十年七月下旬、中学校も夏休みに入った。その当時、既に軍、警察、そして中学校の先生方は、ソ連の対日宣戦布告のことを予想していたのであろうか。羅南以北に家がある寄宿舎生は、帰宅が許可されなかつた。二年生だつた我々には、日本とソ連との間に締結されていた、「日ソ不可侵条約」の不延長の問題で、両国間がくすぶつてゐることなどは知る由もなかつた。上級生の三、四年生は、清津の日本製鉄の工場に学徒動員中であつた。二年生と一年生の寄宿舎生約四十人は、八月十日（あるいは十一日か？）この辺りの記憶はあいまいになつてゐる）北部山岳方面に向かつて避難移動を命ぜられて、徒歩行軍と称して寄宿

舎を出発した。

途中、清津と羅南を結ぶ清羅街道では、軍用トラックで移動する兵隊さんを見送りながら左折して山岳部に向かったが、目的地がどこなのか示されないままに、ただやみくもに歩いていった。夕刻、朝鮮人小学校に到着して、そこで学校からの指示を待った。地元の婦人会によって夕食が準備され、食事後、教室で泊まった。

後日の正式記録によると、ソ連軍の清津上陸は八月十三日であるが、十一日か十二日か正確には記憶がないが、学校から「至急帰校せよ」という指示を受けて、往路と逆順で帰路についた。そのとき既に、北西の山間部方面に避難する人の集団があったが、その集団とは逆方向に歩いている我々寄宿舎生集団を不審に感じた警察官や憲兵から、「お前たちはどこへ行くのか？」と、何回となく質問を受けたが、その都度「学校から至急帰って来いとの指示を受けて戻る途中です！」と、大声で答えて南東に向かって行軍をしていた。ある

憲兵から、「清津に上陸したソ連軍の敗残兵が、途中で隠れているかもしれないから、くれぐれも注意して帰れ」との注意を受けていたので、それからは橋を渡るときは、橋の上から下をのぞき、家の前を通るときは裏に回って確認するなど、余計な時間をかけていて、日も沈んだ夕方に、やっと寄宿舎に帰り着いた。

疲れ果てて帰った我々一同に対して、昨年まで舎監長であった中川先生や配属将校の〇〇大尉、そして残留していた諸先生、事務官、それに帰校していた先輩などから、「よく帰ってきた！無事に戻ってきて何よりだ！」と口々に言われて、温かい歓迎の言葉と共に、できたての握り飯にありついた。腹が膨らみ体も落ち着くと、我に返った心持ちになった。

しばらく休憩していると、「今後、ここにいる者全員で、行動を共にすることにするから、その準備に掛かれ！」という心強い指示があり、学校教練用の背のう、水筒、雨衣などが支給され、さら

に当座の食糧として、学校で保有していた備蓄米などを大八車に積載して、出発準備を完了して移動を開始した。

途中、官舎の前で先生方の家族と合流し、追加荷物を大八車に積載したが、総勢は七十人以上に膨れあがっていた。当面の目的地を朱乙温泉として、夜間行軍を開始した。多分、昭和二十年八月十三日から十四日にかけてのことだったと思う。途中、一生懸命に歩き、「小休止、少し休むぞ！」という号令が掛かると、やれやれという感じとなり、ボタンキューの状態となった。小休止も時間的にはあつという間で、「出発！」という号令が掛かる。眠る時間などほとんど無いが、小休止の間に脳は眠ってしまい、出発の号令が掛かっても仮眠の状態での行軍だ。歩いては休み、休んではまた歩くの繰り返しで、やつとこのことで、朱乙温泉に到着した。温泉街の人々はみんな既に避難してしまい、無人の街となっている。大きな温泉旅館に入り、休憩となる。

温泉につかって疲れをいやそうと期待していたが、残念ながら湯船は栓が抜かれていて湯はたまらず、ただ眠るだけになってしまった。

何時間眠っただろうか？ 移動列車が出るという声で目が覚める。この機会を逃すと、次の南下列車はいつになるのか分からない。直ちに朱乙駅に向かうこととなり、慌ただしく準備をして旅館を出発した。駅には列車が止まっていたが、どこに行くのか、いつ出発するのかが不明だが、南下することは確かなようだった。無蓋貨車に乗り込んで出発を待った。しばらくすると列車は動き出したが、無蓋のために煤煙がひどく、石炭の粉が目に入ってきて大変に難渋したが、いつの間にか眠ってしまい、目覚めたときには列車は吉州駅に着いていた。あとから到着した軍用列車が次々に優先して出発し、我々の列車はいつ出発するのか、時間が決まらないようだった。

三 吉州での出来事

何時間経っても列車は動かないので、この列車

に乗っている代表者が駅長と交渉したが、これ以上の南下は無理のよう下車することになり、吉州製紙工場の社宅に一時的に入って、成り行きを見ることになった。製紙工場には、工場クラブに残留している少数の陸軍守備隊と、僅かな管理人のみしか残っていなかった。我々は社宅に分散して入った。管理人は、「もう避難した社宅の皆さんが戻って来ることはないと思うので、食べ物が残っていたら自由に食べてください」と、親切に言うてくれたので、自由に各社宅に入り、泥棒のようにして食料品を探し出しては食べていた。

社宅には、一泊か二泊したように記憶しているが、食事はグループごとに飯盒炊飯をしていた。毎回のことだったが、食事時間になるとソ連軍の戦闘機の来襲を受けて不快な思いをしたものだった。あるときは、クラブ屋上に陣取り対空砲火を繰り返す守備隊を狙って、猛烈な機銃掃射を受けた。そのソ連機の進入コースにあたっていらしく、社宅も機銃掃射を逃れられなかった。庭に造

られている急造の防空壕に飛び込むのがやっとで、入っただけでも天井の盛土がばらばらと落ちてきて、冷や汗のかきっぱなしだった。ソ連機が去った後、社宅に戻ると屋根瓦は粉々に砕かれて散乱し、部屋のタンスはひっくり返り、小物はばらばらになり、壁には弾丸の貫通した跡がくつきりとみまざり、壁になつていた。初めて体感する機銃掃射のすさまじさに驚かされた。後日に知ったソ連軍の記録によると、吉州大爆撃は八月十六日から十八日の予定であったそうで、我々は幸いにも大爆撃予定前に吉州をあとにしたことになる。

四 八月十五日の玉音放送

八月十五日の、ポツダム宣言受諾の玉音放送は、吉州駅で南下列車待ちのときで、うわさ話としては聞いたが、直接ラジオで拝聴はしていない。

吉州駅にいるときに、既に吉州の朝鮮人は今までに見たこともない旗（現在の太極旗）と、赤旗を振りながらデモを行っているのに遭遇したが、そのころはまだ日本軍も健在だったので、我々に

対して過激な行動はとっていないかった。

あとで知った話だが、吉州の朝鮮人は思想的に日本人には好ましくなく過激な面があるので、なるべく早く南下するように考えられていたのとこのとであった。

五 避難列車で咸興へ

羅南中学校グループ約七十人の集団は、幸いに南下する列車に乗ることができたが、例によって無蓋の貨物列車だった。機関車の煤煙が所構わず舞い込んできて、みんなの顔や手足は真っ黒に煤けてしまった。無事に咸興に着いた集団は、歩いて咸興武徳殿に行った。武徳殿には、既に陸軍病院の傷病兵と、付添いの看護婦さんなど約四十人のほかに、先着の避難民が起居していた。我々はその中に仲間入りした。衣食住のうち、住は確保したし、衣は着たきり雀だがまだ何とか我慢できたが、差し当たり問題なのは食だった。

引率同行でまだ帯剣姿の〇〇大尉の努力で、咸興陸軍部隊から米、小麦粉などの主食、味噌、醬

油、塩、砂糖などの調味料、それに肉、乾物類などの食料品、それに加えて野外炊飯用の大かまど、大鍋などを受領し、さらに中間食として乾パン二人当たり百袋入り木箱などをもらったが、軍用の大八車で数台分の量で、これで七十人の当分の間の食することは解決した。この食料品の確保を最後に、今まで我々を事故なく引率してくれた〇〇大尉は、咸興の陸軍部隊に所属することとなり、お別れした。

〇〇大尉の尽力によって、十分な食料品のうえ、中間食まで確保した我々羅南中学生グループは、毎日カレーライス、豚汁、ぜんざいなどと、盆と正月が同時にきたような贅沢三昧の何日かを過ごした。乾パンの袋を開けて、中の金平糖だけを食べることもしていた。

数日すると、朝鮮人による保安隊が新編されて、日本人は彼らの統制下に入った。日本軍は部隊内に拘束されて、武装解除の準備を始めているとのことだった。そのうちに、保安隊によって我々グ

ループも検査を受け、乾パンの半数が没収された。これからの長期戦に備えて、節食に努めることとなった。陸軍病院の看護婦さんたちから、軍服や靴下などを分けてもらって、早速に着替えができたし、小袋に入った粉末ブドウ糖ももらった。「たくさんなめたら駄目よ！ 鼻血が出るからね。少しずつなめるのよ！」と言われたので、最初はまじめに言われたことを守ってなめていた。

傷病兵と看護婦さんたちは、特別に別れの挨拶も取り交わさずにどこかに行ってしまった。軍服とブドウ糖が、さようならの挨拶だった。甘党の私には、部隊からの砂糖と金平糖、それに看護婦さんからのブドウ糖は最高のプレゼントだった。そのうちにソ連軍の咸興市街への進駐が始まったが、朝鮮人などによる、大々的な歓迎行事についての記憶が私には無い。

六 咸興駅での出来事

咸興武徳殿での避難生活も、あつという間に半月が経ったが、いつまでも七十人の大集団での生

活を続けることは経済的に難しいことで、先生方の旧友を頼ってそれぞれ移り住むことを考えなければならなくなり、南下する列車を待つ毎日となってきた。武徳殿に収容されている一般邦人の人々も、入れ替わり立ち替わりして逐次変化はじめて、そのうちに我々集団の咸興出発の日が決まった。

咸興駅に集合した我々は、ソ連軍憲兵による所持品検査を受けた。中学生グループの検査は簡単に終わり、次いで先生グループの検査は執拗になされた。特に中川先生は、我々の引率責任者で生活費として相当額の公金を携行しておられたが、この現金をソ連軍憲兵の前にさらけ出す結果となった。中川先生は、「この金は、多数の生徒の生活資金で個人のものではない！」と具体的に説明をして、その場ではソ連軍憲兵も了解し無事に通ったが、その後一人のソ連兵にマンドリン銃（ソ連兵が携行している自動小銃のこと）で脅かされ、こずかれて駅舎裏に連れていかれた。それに気付

いた我々は、駅舎裏の現場に行き、その兵隊の相を記憶し、他の者が憲兵に通報し助けを求めるなど協力して、大事な生活費をソ連兵から取り戻すという出来事があった。

七 鉄原での思案

咸興駅から避難列車で南下したが、鉄原駅に着くまでは特別に記憶に残るような出来事はなかった。ただ、生理的現象の処理には苦労したことを思い出す。男性や子供はそんなに問題はないが、女性には随分と困ったようだった。

我々の避難列車は、運行の優先順位が低いのか、停車駅とか停車時間はめちゃくちゃという感じで、やつのことで鉄原駅に到着したが、ここでも随分長く停車させられた。その時点ではまだ三十八度線という国境問題は起きておらず、そのまま時間さえ気にしなければ、朝鮮半島の南端まで行けると思っていた。私は、愛媛に帰ることを希望して先生に申し出たが、先生からは、「時期尚早」と言われた。

羅南中学校グループは、まだ日本人が多数残っていて生活のし易い咸興で日本人世話会の活動を支援することと、咸興に戻るのが適当であると判断し、そのまま同じ避難列車で再度咸興に引き返すことになった。だが、理由がよく分からなまま元山で途中下車させられて、既に空家となっていた元遊郭の建物に強制収容させられて、一般邦人の人たちと一緒に集団生活に入った。

八 元山での生活

収容当初は、朝鮮人経営の植木畑の作業に狩り出された。夜になると、「マダム、ダワイ！ マダム、ダワイ！」と叫びながらやってくる、二人ぐらいて組んだソ連兵の来襲が毎夜のごとくであり、女性を天井裏とか押し入れの奥とか、また床下などに隠す作業を分担し、女性の抜けた大部屋の広々とした所に、悠々と横になって手足を伸ばしていた。ソ連兵は、黒光りする拳銃を右手に持ち、左手にはろうそく台を抱えて侵入してきた。我々は、頃合を見計らって一斉に起き上がると、ソ連

兵はろうそくの火を揺らせて、拳銃を振りかざしながら慌てて部屋から出て行った。羅南中学校グループには赤子がいなかったの、泣き声で女性が発見されるということがなかったのは幸いだ。避難民の中に風変わりな女性が一人いて、ソ連兵がきても隠れることもしないという人だったが、この女性が風呂場でソ連兵によって恥ずかしめを受けたことを覚えている。そのうちに、現地人がソ連兵を案内して来るようになってきたが、我々もそれを察知すると撃退用具として備えていたバケツや空缶を打ち鳴らして、追いつ返していた。この抵抗行為が、唯一の防衛手段であった。

避難生活も長くなると、日常の生活も苦しくなってきた。まずその最たるものが食糧問題だった。上級生は、毎日元山港に荷役作業に出ている。作業は、ソ連軍が捕獲した日本軍の軍用物資、各種の鉄材、石油缶製作用のブリキ板、爆雷用の円筒缶などの各種資材をソ連船に積み込む作業で、焼け錆びた航空機エンジンとか、錆びのひどい鉄屑

とか、こんな物までもと思うものがあつたという話だった。また、倉庫に山と積まれた爆雷を指さして、「こんなにたくさんありながら、なぜ日本は戦争に負けたのか？」と、ソ連兵から質問をよく受けたと言っていた先輩もいた。

上級生が働いて得てくる報酬は、大豆、高粱、粟などの雑穀類の現物支給で、どうしてか米は無かった。これらの穀物は作業終了後、岸壁のコンクリート床に袋から出してあり、それを作業者が携行する袋に我先に入れて持ち帰るのだった。この報酬穀物が我々にも配分された。ときにはバラフィンのようなバターもかすめてきて、これで炒め物を作り飢えを凌いだ。

避難開始当時、先生が持っていた生活資金は既に無くなり、自活するしか生きる道はなくなっていた。上級生の働きだけでのんんとするわけにもいなくなってきたので、二年生、一年生は元山市の日本人の家などに物乞いに出掛けて、いくらかの金、食料品、雑誌、新聞などを施してもら

い、生活の足しとしていた。

動員学生を引率したまま帰って来ない中学校の先生の家で、幼児を抱えた奥さんから、「主人はいつ帰宅するのか分からず、持っただけでも略奪されるだけだから、これ売って少しでも足しにしよう！」と言って先生の背広をもらって帰ったところ、中川先生から、「盗んできたのでは？」と疑われたので事情を説明したが分かってもらえずに、中川先生とお礼に行ったということもあった。その先生の家にはそれから二度ほど伺ったが、その後お会いすることはなかった。

九 羅中グループとの別れ

羅南中学校グループの面々も、両親、親戚、知人などに会ったり、所在が分かったりしてだんだんと別れてしまい、めっきりと減ってきた。私も、両親と妹が元気で咸興にいるということが伝えられて、世話になった中川先生ほか、生死を共にした友人たちと別れて咸興に行くことを決心した。

切符も持たずに、無蓋貨車に潜り込んで咸興に

向かった。咸興駅で朝鮮人駅員に咎められたが、簡単な調べで解放され、駅前の直線道路を公会堂に向かって歩いた。以前、「夜間九時のサイレンの合図で、それからの外出は禁止、違反者は射殺する」という決まりを聞いていたが、そのサイレンが鳴ったので慌てて近くの日本人宅に飛び込んで、事の次第を話し、そこに一泊させてもらうことになった。翌朝、日本人世話会の場所を尋ねている際に、偶然、会寧専売局長の八木さんに会い、両親たちは西本願寺にいることを聞き、すぐに西本願寺に向かった。

十 両親、妹と感激の再会

西本願寺では、学校の先生の経験のある母は、「避難民孤児のための孤児院」で保母として働いていた。四月に羅南公立中学校に入学して寄宿舎に入るため家族と別れてから、八カ月ぶりに感激の再会を果たした。

孤児院には約四十人の孤児がいたが、ほとんど着の身着のまま不衛生なことこのうえなく、着

ているものに触れると虱がばらばらと落ちてきた。幼児の衣服についている虱は、年長者が取ってやるのが日課になっていた。そんな孤児を相手に、母は働いていた。十二月になると、ソ連軍の水蒸気殺虫車が虱退治にきた。庭にセットされた殺虫車のボイラーに薪を投げ込んで湯を沸かすことから始まった。殺虫作業は一日掛りで行われたが、一時の気休めですぐにまた発生した。この虱のため、発疹チフスが蔓延した。孤児院では発病者を別の家屋に隔離したが、部屋数も少なく不足していたので、亡くなった幼児は、菰こもに包まれてどこかに運ばれた。

そのうちに私も発病し、隔離病棟に入れられた。何日間か、高熱のため全く記憶がなく生死の巷をさまよったが、体力があったのか、生命力が強かったのか、隔離病棟から出ることができた。妹も隔離されたが無事に戻り、家族四人が再会した。四人が顔を合わせたのも束の間、母も発疹チフスに苦しむこととなったが、孤児院で働く職員とい

うことで病院に入れられたが、医者いしやの診察は受けても投薬はなかった。回復には栄養補給が最高の治療方法というので、毎日のように市場に行き、栄養価の高い物を衣類と交換して求め、病院に運んだ。

十一 父の死

昭和二十年も押し詰まったころ、とうとう父も体調が悪くなった。父は入院中の母のことを心配して、「病院で年越しをするものではない！ 医者いしやに頼んで何とか退院させて連れて来い」と強く言っていたので、医者いしやに申し入れて、何とか年内に退院させて帰宅することができたが、そのころになると父は高熱を出して苦しんでいた。

母が帰宅するのを待っていたごとくに、昭和二十一年一月二日に西本願寺内の隔離室で息を引きとった。父は自分の死期が近いことを察知し、妻である母に会って死にたかったのであろうと、後になって思った。死の迫った父に母を会わせることで、最後の親孝行をしたことを嬉しく思い、涙

がとめどもなく流れたものだった。「人間、衣食足りて云々……」という格言があるが、食足らずの生活が長く続くと、思考力も知的感情も鈍っていくものだが、父の死に直面したときは本当に涙が枯れるほど泣いたものだった。

西本願寺で死亡したために、「略式仮戒名 栄西居士」を頂くことができて、引揚げ後に真言宗菩提寺から改めて正規の戒名を頂くことができた。

父の亡骸は他の死亡者と同じく、菰巻き姿で安置所に置かれ、そのうちに威興の山のどこかに埋葬されたが、それがどこかは分からない。父も亡くなり、母も病弱となり、働き手がいなくなった我が家の三人は、孤児院から掛布団一枚をもらい、孤児院をあとしなければならなかった。

「働かざる者食うべからず」のごとく、これからは三人の力で、零下二十度から三十度にも下がる厳しい寒さの威興の冬を生き抜かねばならないと、中学二年生であった私は、「母と妹の二人の面倒を見なければという強い責任」を感じた。

十二 収容所での集団生活

私たち母子三人は、避難民収容所になっている古い朝鮮人小学校の教室の一隅に陣取って、一応の寝場所を確保した。幸いなことに、横が倉庫になっていて古机が積み重ねられていた。この古机が越冬のための薪となり助かった。独り暮らしの婦人が隣にいたが、お互いの寒さ凌ぎに湯たんぽ代わりとって添い寝をしてくれた。食事は、世話を通じて塩味のきいた高粱飯か、お粥をカップ一杯あて支給された。だが、これでは空腹を満たすことはできない。そこで、三人で相談して物売り商売することに決めた。資本金作りは、父が大事にしていた国民服を手放すこととし、朝鮮語の話せる母が、新品と同様であると言って、ある程度の金額で売ることができた。この金を元手にして、握り飯、餅などを仕入れて売り出した。売れたらその金を元手にしてまた仕入れる。妹と一生懸命に頑張ったが収入はなかなか増えず、かえって資本金は目減りしてきた。母が、「できた物

を仕入れて売るのである。商売にならない。家で作って売ればそれだけ収入も増える」と言っていて、製造、販売の方法に変えることとした。当初は確かに収入が増えたが、そのうちに同業者が増えてきて思うように売れなくなり、廃業することとした。

今度は、妹とソ連兵の食事時間をねらって、食堂に通うソ連兵に向かって、「フレバー、ダワイ！（パンをちょうだい！）」と声を掛けた。ソ連兵も子供、特に女の子は好きなようで、「マリーンキ、ハラシヨ！（子供はかわいくていいね、いい子だね！）」と近寄り、食べ残したスープや、大きな円い高粱パンをちぎってくれた。残飯乞いが三人の栄養源となった。

このころから、ソ連兵の日本人に対する評価が良くなってきていた。「ヤポンスキー・ハラシヨ。カレンスキー・ニハラシヨ！（日本人はよいが、朝鮮人は悪いやつだ！）」と言っていた。残飯乞いでは食べて終わりだ。何とか収入を得なければと考え、働くことを考えた。妹は、知人の紹介で朝

鮮人の家に住み込みで子守りとして出ていった。

私も知人の紹介で、旧威興陸軍病院がソ連軍病院として接収されていて、そこに雑役作業員として働くことができた。作業は、飯缶洗い、薪割り、風呂炊き、その他の清掃作業で、いわば雑用だったが、毎朝一里ばかりの道をてくてく歩いて出勤した。先輩格の男から飯缶に残った食べ物を、持参した鍋に分けてもらい夕方持ち帰るという毎日、ご飯、スープ、焼肉サラダ、揚げ餅などいろいろなものがあった。これを持ち帰るとみんなは喜んで買ってくれて、ただで収入を得るといふ最高の商売になった。携行する鍋も、増やして上手に持ち帰っては売り、喜ばれてよい稼ぎになった。隣の婦人から、「私も雑役に出たい」と言われたので紹介し通い始め、女性ということでは非常に重宝されたが、一度危険な目に遭ったので、残念ながら辞めてしまった。

雑仕事にも慣れてきたある日のこと、リンゴ箱に入っている粕殻を、ごみ捨て場に捨てるように

指示されたので捨てに行ったところ、箱の中に白いものが三個見えるではないか、慌てて籾殻をもう一度かき回すと、さらに二個出てきた。卵などもう数カ月も食べていない。三個あれば我が家三人が一個ずつ食べられる。三個頂戴して二個残っていたと、コック長に届ける。正直ではないが、背に腹は替えられないことだった。

おかげで、コック長の絶大な信用を得る結果となった。それからは、残飯配分ではコック長がわざわざ我々の所にきて、私に「これはお前に全部あげるの、お前が欲しいだけ取れ、そして余れば他の連中に分けてもよい」と言ってくれ、そのうちに作業員の先輩連中も、私を責任者として認めるようになった。外国人は日本人と違い、私事をはさまず善悪に対しては非常に厳しいと聞いていたが、これほど明確だとは思わなかった。

十三 山岳地への強制移動

昭和二十年、酷寒の北朝鮮、厳しい寒さの中、咸興の避難民収容所で越冬することができた。こ

れも病院での雑役業務が続けられたからである。

明けて昭和二十一年の四月になると、日本人世話会から南下移動の話があった。だが全員南下させるということには、ソ連側と朝鮮側とに考えの違いがあり、真実は不明であるが、日本に帰すということではなく労働力として必要な所に移動させるということであつたようだ。実際には、三十八度線近くまで列車で南下させる組と、労働力不足の山岳地に移動させる組に区分されていた。

私の家族は、運悪く貧乏くじを引いて、吹雪のまだ舞う四月下旬、発電所の人工ダムのある山間に強制移動させられた。後日兄に聞いたところによれば、発電所は「赴戦江発電所」で、ダムは「赴戦湖」であると言っていた。

もちろん私たちは、どこに移されるのか全然聞かされずに、南下するものと信じて貨車に乗り、咸興駅を出発した。途中で、小型のローカル車に乗り換えさせられたが、そのときに初めて山岳部に向かっていることを知った。途中の駅々で、グ

グループごとに降ろされ、私たちの約五十人のグループも名も知らぬ小さな駅で下車し、古い廃屋に入れられて寒さに震えていた。ここにいつまでとめられるのか、皆目分からずに不安が募っていた。

翌日、どんな仕事ができるのか、特技調査があった。母はミシンが踏めるので洋服屋に、私は農家へ住み込み支援、妹は子守りとして住み込むということが決まった。何も特技のない老人や、赤ん坊を抱えた母親は、日雇い労働の応援作業となった。

この労働区分けにまつわる悲しい出来事がすぐに起きた。三十歳代後半の母親と女の子二人の家族が私たちのグループにいたが、働くには子供が小さく、特技も無かったのか、将来を悲観した末に、人工ダムに三人で入水し、一家心中を図った。だが、小さな子供二人は溺死したが、その母親は死にきれずに助けられて、朝鮮人保安隊に連れて行かれた。その後、この母親がどうなったか皆目分からず、我々は何の助けもできずに申しわけな

く思っている。男手がない、幼児を抱えた一家の苦勞は、普通の常識では考えも及ばない大変なものがあった。これはほんの一例の話である。

母は仕事を始めたが、生地の裁断までさせられることとなり、自信を無くして断り、私と妹はある程度裕福な家族であったので、住み込んで働くこととなった。住み込みの条件は食、住付きで、無給の労働であった。私の場合は、住み込み先に中学一年の男の子がいて、夜は家庭教師も頼まれた。英語、数学、そして化学を教えることになったが、これらの科目は既に習った範囲で、しかも教科書は日本語のものをそのまま使用していたので、教えることは容易であった。ただ、敗戦によって立場が逆転したため、事と内容によっては説明が難しく困ったこともあった。昼間の農作業では、ジャガイモの植え付けと、芥子けしの種まきなどだったが、主として畑への運搬作業で、直接の農作業はあまりしなかった。

五月になると、鮎ではなかったかと思うが、小

魚が産卵のため大挙して、上流ダムにのぼってき
た。二日間の解禁日には、村総出で小魚すくいが
始まった。水の色が変わるほどで、浅瀬に入ると
水音を立てて群がり川底の小石が見えなくなる様
には驚いた。石油缶五杯ほどが、一軒の平均収穫
だと聞かされた。各家では、これで佃煮、干物を
つくり冬場への貯蔵品とするのだが、この作業が
大変で、村中に佃煮つくりの匂いが流れしみこん
でいた。

米が一人一日四合の計算で三十日分の配給があ
ったが、私と妹は住み込みの身であったので、そ
の分を売りさばくことができた。当時の相場は一
升百円だったと記憶しているが、ソ連軍票と朝鮮
円の半々ぐらいで現金に換えた。この金は、それ
からの逃避行の旅費として大いに役立った。

この山岳の村に約一カ月收容されていたが、再
び咸興へ移動の指示があった。咸興の避難民收容
所には一週間ほど滞在したが、六月上中旬で特に
寒くもなく、六畳ぐらいの部屋に頭を両壁側にし

て足を出し、みんな背中を合わせて同方向を
向いて雑魚寝をした。この間、日本人世話会から
朝晩二食、お椀に一杯の雑炊のような食事が配分
された。

十四 三回目の南下逃避行

六月下旬に再び南下の指示があったが、間違い
なく南下するのだろうかという疑いをみんなが持
っていたが、今回は間違いのないようだった。しか
し、避難列車がどこまで我々を運んでくれるのか
は全く不明であった。

あとで知ったことだが、山岳地への労働力支援
のため強制的に移動させられたのには、南下輸送
の順番待ちのための一時待機の避難であったとの
ことだった。朝鮮当局は、「日本人がいると、米の
無償配給をしなければならぬので無駄である」
と考えていたが、ソ連軍当局は、「日本人を人質と
して、いつまでも拘束しておきたい」と考えてい
る。両者には根本的な違いがあったようである。

案の定、南下避難列車から降ろされた。駅名な

どは分からないが、そこから死ぬ思いの苦しみが始まった。ここでソ連軍に発見されると、また強制的に出発地に戻されるといわれていたもので、山間部をつとめて夜間歩いた。老若男女や、メンバーの構成によって自然にグループができてくる。

避難列車から降ろされたときは、我々のグループは百人ぐらいだと思ったが、体力のない者や老人家族は、だんだんとグループから取り残されていった。グループリーダーの指示によって、途中にある保安隊の詰所に挨拶に寄ると、そこで持ち物検査があった。そして許可が出ると、再び歩き出す。そんなことを繰り返しながらの逃避行となった。

農家の軒下で仮眠したが、目が覚めると着ているものは夜露でびっしょりとなっていた。そのままの姿で、薄暗い夜明けの中を歩き出す日々の繰り返しだった。幸いに雨には遭わなかった。途中で擦れ違った朝鮮人に、ソ連兵の巡察の様子、道の方角などを聞いたが、右だ、左だとでたら目

な返事をするので、随分と悩まされた。そのうちにグループは、三々五々と小グループに分かれて縦長になり、しかも振り返って見ても、その姿が見られないほど離れていた。分かれ道には小石を積んで、正しい方向を示しながら進んでいった。

疲れのひどい母を抱きかかえて、遅れまいと懸命に歩いていると、今度は妹が大人の歩く速さに追いつけずに離れてしまい分かれ道で待っていると、グループと遠ざかりそれに追いつくのに懸命になつて歩く、このようなことを繰り返しながらの難行苦行の逃避行となった。

目標としていた三十八度線を流れる河の手前の道路上には、ソ連兵の歩哨が自転車で頻繁に巡察しているということで、別の渡河地点を探すために、民家に立ち寄って道案内を頼んだが、「足元を見る」というのはこのことか、法外な金額を要求されたが致し方なく払える人は払った。

十五 三十八度線を越す

「三日三晩」と言葉ではひと言で済むが、実際

の行動は大変に長く苦しい避難行動であった。

道案内人の言葉に従って早朝出発したが、ソ連兵の巡察にも発見されることなく河岸に到着。いよいよ渡河となった。最初に母の手を握って河に入ったが、想像以上に流れが速くときどき流れに足を取られながら、どうにか母を南朝鮮側に送り届けた。再び引き返して、妹を背負うようにして渡った。流れの速いところは三十メートルぐらいで、深さは深いところで一メートルもあった。

やっと全員河を渡り終えたが、張り詰めていた緊張の糸が切れた上に、昨夜からの寝不足が重なり、ぐんぐんりの状態になって河岸でごろごろと転がるように寝てしまった。

そのうちに南朝鮮の警察官が様子を見に来て、「ご苦労さんでした。ゆっくり休んで収容所に行ってください」と言って道順を教えてくださいました。だが、みんなは起き上がらなかつた。再度警察官がきて、「そろそろ移動しますか？」という催促でやっとなんは収容所に向かって歩き出した。その

日は我々の他に渡河したグループはなかつたので、あとになった人々のことが心配になった。

途中で、初めてアメリカ兵に会ったが、その姿のなんとスマートなことか。ソ連兵や北朝鮮の警察官の姿を見ていた私たちの目には、雲泥の差をしみじみと知った。

収容所では部屋に案内され、温かい食事と明日の京城（ソウル）までの移動についての指示があった。久しぶりに安全な夜を迎え、安心して深い眠りについた。

元気を回復した我々のグループは、翌朝収容所からアメリカ軍のバスで京城の日本人世話会の収容所に送られた。大学生のような若い世話係の案内で、部屋の割り当てがあり、いろいろな調査、身体検査などが行なわれた。それ以外の行動は全く自由で、外出も自由だった。母は、身も知らぬ人から呼びとめられたので、何事かと思い付いていったところ、沖繩に帰る人で、日本円紙幣を朝鮮円紙幣に有利な交換レートで交換する話をして

くれた。当時、沖縄は米軍管理下になっていて、ドル建てで日本円紙幣は使えず、京城に滞在中は朝鮮円紙幣が必要だったからである。

京城には数日滞在したが、その間に一応人間らしさを取り戻すために必要最少限の衣服を求め、さらに亡き父と親交のあった京城在住の人々に、母と挨拶廻りなどをして過ごした。

十六 佐世保に上陸

京城から仁川に移され、仁川港からアメリカ軍の上陸支援船、「クレメント・クレイV066」に乗船して佐世保港に向かった。当時の佐世保港は、各種各様の帰国船が多数入港停泊していたので、すぐに岸壁に着くことはできずに、懐かしい日本の緑の山々などを眺めながら着岸の順番待ちをしていた。深い船倉から毎日何回となく昇り降りをしては、甲板から日本の緑、かわら屋根の家並みを眺めながら、思いは故郷に飛んでいた。故郷の様子を知らない妹に話を聞かせたりしていた。

やっと日本に帰った安心感で、しんみりという

ような思い出話や、これからの先行きのことなどを三人で語り合えたことで、非常に意味の深い十日間であった。

眼を近くに転じると、茶色に錆びて半分を水面下に没した航空母艦や、潜水艦など日本海軍のかつての艦艙の現実の姿が目に映り、敗戦の実態をしみじみと感じさせられた。

上陸が許されて、佐世保港の岸壁に一步を踏み出したときの喜び！改めて「日本人であった！」と思いついたような気持ちと共に、大変な苦労の連続から完全に開放されたという、何物にも変えがたい喜びを感じ、とめどもなく滲んでくる涙、あふれ流れる涙で顔中がくしゃくしゃになっていたことを今になっても思い出す。

十七 最後にひと言

終戦後、衣、食、住、に事欠く、避難民生活という苦難の中、異国の地で思い半ばで亡くなった多くの方々、さらには苦難の末にやっと日本に引き揚げてこられたものの、それまでの苦労が元で

亡くなられた、多くの方々のご冥福をお祈り申し上げます。

また、この苦勞を胸に秘めて頑張つてこられた多くの方々の、さらなるご健康をお祈り申し上げます。

五十七年ぶりに届いた手紙

愛知県 牧山邦彦

一 肥前平戸から朝鮮に

最近判明したことだが、長崎県平戸市の「松浦史料博物館」に保管されている「増補 藩臣譜略」に、牧山家の記録が残っていた。それによると、牧山家は代々平戸藩士で、松浦家第二十六代鎮信公のときから馬廻役として仕えていて、豊臣秀吉の朝鮮出兵にもお供している。だが、明治維新の廃藩置県によりお役御免となつて、収入の道がなくなり、明治八（一八七四）年生まれ祖父、安房の時代に朝鮮に渡つたとのことで、父、牧山直彦が生まれたのが明治三十五年だから、日露戦争の二年前になる。

祖父は、朝鮮の大邱（現在のテグ）に住んでいて、父は平戸の猶興館中学校から京城医学専門学校に進み、卒業後は大邱道立病院や、釜山府立病